



【ジャケット】

色分け

黄色

緑

(秋)

秋

秋

秋

秋

秋

灰色のハイライトは状況説明

暁鞠子様に「薫」の声で読んでいただきたいです

暁鞠子様に「秘書」の声で読んでいただきたいです

【台本】

／／トラック①

十一月二十日 はっか 午後4時5分 とないぼうしよ 都内某所

秋、監督の車を待っている

「は〜い♡ 監督さん。こちらですよ」

「よろしく願いますね」

秋、監督の車の助手席

「自信ですか……？ もちろんありますよ。

わたしのおっぱいが負けたことありますか？」

「ああ、今日のお相手も負けたことないんですね。

ふ〜ん」

「では、その人の対戦動画、観させていただきますね。

タブレット、お借りしますよ」

///動画再生中

薫

「ねえ奥様、まだどちらのおっぱいが上か、

わからないのでしょうか？」

女①

「うんん！　ぐうううう！　負けてない……

まけてな……！　ぶううううう！」

薫

「あら？　なにかおっしやいました？

聞こえませんが♡」

女①

「んっ！　んぶうう！　んぶうう！」

秋

「この、おっぱいで絞め上げてる方が、ほう

私の対戦相手ですよね？　うふふ♡」

女①

「んおっ！　おっ！　ぐるじい！

おっぱい……やめでえっ！」

薫

「苦しいですか！　ごめんなさい。

でも、これ喧嘩ですからあ♡」

///動画スキップ

薫

「こんなのはどうぞでしょう？」

女①

「いやあああっ！　逝くっ！　逝くうううう！」

薫

「んふっ♡　無様ですよ」

もう少し頑張ったらどうです?」

「や、やめ! ああああー!」(絶頂)

///動画一時停止

「対戦相手が弱すぎますよね。いいですね、楽に稼げて。別に監督さんが思うほど強くないと思いますよ」

///動画再開

「もうやめてえ……こうさん……こうさんします……」

おっぱいは……おっぱいはやめて……しぬ……

しんじゃいます……ぶぐううう!」

「だめです♡ わたしのおっぱいで、

窒息してくださいね♡」

「んんんーッ!! んんッ! んんーッ!!

ん……んう……ぐぶ……」

「ふふ……ああ〜気持ちいい♡」

「調子に乗っちゃって……うふ♡

おっぱいだってわたしの方が大きいのにねえ」

「ん?」

///動画の続きが流れる

秋

薫

薫

薫

薫

薫

薫

薫

薫

「監督さん。これ、撮れてますよね？」

「はぁ〜い♡ 秋さん、はじめまして。」

今度、秋さんと喧嘩する薫かわると申します」

「ねえ、秋さん……」

「おしっこ噴き出して失神したくなかったら、

逃げた方がいいですよ♡」

「おっばい大きいって威張いばってるみたいですけど、

わたしの方がどう見ても大きいですから♡」

「Lカップのおっばい、見えます？ 死にたいなら……

挑んできてくださいね」

「ああ！ でも、無理しないでください！

おっばいで窒息しちゃうの怖いですよね？」

「逃げてでも誰も責めませんから♡

じゃあ、勇気があるならやりあいましょ？

ひん・にゆう・さん♡ ばいばい」

/// 動画終わり

「あはは♡」

秋

「たまにいますよね。」

何回か勝って、勘違いしているバカな女って」

秋

「監督さん？ 今日の露天風呂って貸し切りですよね？」

秋

「よかった。なら誰にも邪魔されませんね」

秋

「うふ♡ おっばいで窒息、ですって……」

誰に言ってるんでしょうね？

久しぶりに絞め殺したくなっちゃった♡」

秋

「監督さん、一つお願いがあるんですけど、

聞いてくれませんか？」

///トラック① 終

／／トラック②

秘書

「秋さま、ようこそいらっしやいました。」

秋

「脱衣所はこちらになります」

秘書

「ありがとうございます。素敵な露天風呂でやらせてくれるのね」

秘書

「監督の計はからいです。思い切りやり合えるように、と。」

お着替えいただいたら、奥の扉へどうぞ」

秋

「わかったわ。あなたも大変ね」

秘書

「お気になさらず。本日のお相手の薫さまですが、

すでに露天風呂でお待ちです」

秋

「そうなのね。うっふふ……楽しみ♡」

秘書

「今回は流石げきとうひっしに激闘必至かと思われます。お気をつけて」

秋

「ふ〜ん。じゃあ5分で絞め潰すから、

管理室からよく見ててね。」

「どうやら薫さん、格の違いがわかってないらしいの」

秘書

「承知しました。しっかり見届けます」

秋

「じゃあ、行ってくるわね」

秋、ドアから露天風呂に出る

秘書

「はあ……」

秘書

秘書

(秋)

薫

薫

秋

薫

秋

薫

秋

薫

「どちらも信じられないほど負けず嫌いですね」

「今日は壮絶な一日になりそうです」

場面転換

露天風呂 壺湯つぼゆ

薫、壺湯に入って監督と話している

「ええ、もちろん、圧勝すると思いますよ。」

監督さんも、わたしのおっぱいが上だと思いませんか？」

「そうですね、向こうが泣いて謝ってきたら、

許してあげてもいいかな」

「だれが泣いて謝るんですか？」

「あら、噂をすれば……」

薫、壺湯から立ち上がる

「お待たせしました」

「逃げずに来てくれたんですね。ありがとうございます」

「逃げる理由がありませんから。」

動画では散々煽あおってくれてありがとうございます」

「煽あおるなんてとんでもない。本当のことですから」

秋・薫、睨み合い

薫 秋 薫 秋 薫 薫 秋 薫 秋 薫 秋

「監督さ〜ん。ここから先は女同士のお話があるので」

「出て行ってもらえますか？ 止められても困りますし」

「ふふ♡ 失礼しますね」

秋、薫の入っている壺湯に入る

「あら。壺湯つぼゆに2人入るのは、マナー違反ですよね？」

「じゃあ追い出してみたら？ できないと思いますけど」

「まあ♡ 冗談が好きなんですね」

薫、秋の胸を握る

「このおっぱいだと、

せいぜいJカップくらいでしょうか」

「残念でした。Lカップですよ」

「ご自分のサイズを言っちゃいましたか？」

「ご心配なく♡ わたしもLカップですから」

「あら、そうなんですね？ それで？」

「そのおっぱいで私を窒息させるんですけどっけ？」

「違いますよ。窒息させて、おしっこも漏らさせます」

秋 薫 秋 薫 秋 秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋

「随分な自信ですね？ そのプライド……
バキバキにへし折ってあげますね。」

「このおっばいで♡」

「できますかね？ そんな貧乳ひんにゅうで」

「貧乳ひんにゅうのくせに口だけは達者たっしやなんですね」

「あら？ 自分が負けないと思ってます？」

「今日窒息しちゃうのは、そちらだと思えますよ♡」

「それは楽しみですね♡」

「うふふ♡ ええ、楽しみ♡」

「あ。あと、監督とさつき話した時、

本当に死ぬくらい絞めていいか聞いたんですけど」

「『救急車で済むくらいで勘弁してくれ』ですって」

「あら、良かったですね！ 命の保証ができて！

ぎりぎりまで苦しませてあげる♡」

「病院に運ばれたあと、

『おっばいで窒息させられた』って、はっきり言ってね」

「あはは♡」

「んふふ♡」

薫

秋

薫

秋

薫

秋

秘書

秘書

秘書

秘書

秘書

「ではお互い、覚悟があるってことで……」

「そろそろ始めましょうか。女の潰し合い」

「ふふ……思いつきり絞めていいですよ」

「そちらこそ……」

「んんんん！」

「ああああっ！」

場面転換 管理室

「秋さま。25歳。バスト110センチ、Lカップ。

戦績、十戦全勝^{じゅうっせん}」

「薫さま。25歳。バスト110センチ、Lカップ。

戦績、九戦全勝。お互い子持ちで、おっぱいも出ます」

「監督、救急車呼ぶなら、

ご自分で説明をお願いしますね」

「どちらも瀕死^{ひんし}になるまでやりあうつもりです」

「ほら、闘いが始まりますよ」

///トラック② 終

薫 秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋

「まだ勝つつもりなんですネ！」

絞め潰し合いなら、負けませんよ……

はあはあ！ ううう！」

薫、秋の髪を引つ張る

「はあはあ！ ほらあ！ あなたが落ちるのよ!!」

秋、薫の髪を引つ張り返す

「くっ！ おっぱいで勝てないから髪引つ張るんだ？

情けないですね♡ おかえしよおおお!!」

秋・薫、蹴り合う

「、ああアツツ!! いったああああ!! このおおお！」

「んああアツ！ 行儀の悪い脚あしねえ!! ふんっ！」

「ぐっ！ ああああ！ おっぱいばかり！」

蹴らないでください!! 妬ねたみですか!? このおおおお！」

「だれが！ あなたのおっぱいなんか！ 妬ねたむのよ！」

んあああっ！ ぶふうううっ！ 顔、蹴ったわねえ!!」

「ぶふううっ！ そっちこそ！ やりましたねこのっ！」

「ぶふううっ！ なによおっ！ ぶふううっ！」

「ぶふううっ！ んふうううっ！」

秋 秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋

「んんんんんんッ!!」

「んんんんんんッ!!」

「はあ! はあ! はあ! はあ! はあ! はあ!

「ふう! ふう! ふう! ふう! ふう!

秋・薫、立ち上がる

「ふんんんっ! 押し出してあげる♡」

「んぐううっ! 乳相撲ちちずもうで勝つ気ですか♡」

「んんんんッ! ふんんんんんんッ!

「んんんんッ! 圧あつがないですね、雑魚おっぱいさん♡」

「はあはあ! そっちが潰れてるのよ? 勘ちがい女♡」

「んん♡ はあはあ! まけませんよ…… はあはあ」

「わたしだっ……はあはあ! んんんっ……♡」

「んんんんっ……♡ 落ちなさいよおおッ!

「はあはあ!! こっちのセリフよおおッ!

「くうううううッ!!」

「んああああッ!! あッ♡ こんな……ときに……!」

秋、母乳が胸から出始める

「で、でちやうう♡ はあああああッ!!」

秋 薫 秋 秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋 薫

「うううううんッ♡ こんのおおおッ!!」

「あああああああッ!!」

秋、壺湯から薫に押し出される形で落下。

秋、仰向けに倒れ込む。

「はあはあはあはあはあはあ……んふ♡」

「はあ! はあ! はあ! はあ! はあ! はあ!」

薫、壺湯から出て秋の前に。

「弱いすねえ♡

ごめんなさいね、おっぱい大きすぎて♡」

「ふう……ふう……ふう……潰す」

「母乳まで噴き出しちゃって♡ 恥ずかし♡

悔しかったらやり返したらどうですかあ?」

「あは♡」

秋、立ち上がる。

「謝れば半殺しはんごろで許そうと思ってましたけど、

やめました♡」

「いいですよ、別に。謝る気、ないんで」

「あら、そうですか」

秋

「ねえ、薫さん。こういう撮影って……
事故はつきものですよね？」

「はい♡ わたしもそう思いますけど？」

秋・薫、再び接近

秋、薫の両乳首を指で潰す

「んっ♡ くあああああ！」

「ふふ……乳首、握り潰してあげる。 ああああんっ！」

薫、秋の乳首を握り返す

「お乳の潰し合いですか？ 受けて立ちますよ？」

「あああああッ!! いい度胸ですね……」

「くううううッ! いったあ……ッ!!」

秋 薫 秋 薫 秋



「はあはあはあ！ 痛いなら離れたらどうです？」

「ふうふうふう……！ そっちこそ、

本当は痛くてやめてほしいんですよ？」

「はあはあ！ じゃあこのまま、捻^{ひね}り潰してあげる♡

「どうぞ♡ その前に……ふうふう！ 握り潰します」

「くっ!! ん、ああああああああああ!!」

薫 秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋 秋 薫 秋 秋 薫 薫

「、あああああああああッ!! いやああああああ!!」

「乳首ばかり!! 握るんじゃないわよ!!」

「んあああああッ!!」

「そっちこそお! おっぱいに! 爪、立てるなあ!!」

「ふう! ふう! ふう! ふう! ああああああ!

ちぎれるううううう!!」

「、あああああああ……!! もげるううう!!」

「この……メス豚あ!」

「なによ雑魚ばい!」

「こんのおおお!!」

「このおおお!!」

秋・薫、同時に股間を蹴り合って地面で悶える

「はあああああ! ああああッ! まんこが……

んううッ! モロはいつた……!」

「ああああ……! あああ! あああ! このお!

蹴ったわねええ! はあ! はあ! ああああ!」

「あああ! ああああッ! なによ、痛かった?」

「んうッ! ああああああッ♡」

薫 秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋 秋 薫 秋 薫 秋

「電気あんまは好き？ ねえ!?」

「んおおおおおおおおッ!! おッ!! おふっ♡」

「あははあ♡ いい眺めなが! そんなにこれがいいんだ?

「あああッ♡ んあああああんッ♡」

「はあはあ♡ 気持ちよくて力抜けちゃった?

「じゃあ——」

「次は苦しいの行きましようか♡」

「はっぶうううううう!」

「ふふ……♡ 言いましたよね? 窒息させるって」

「んぐっ! はあはあはあ! ぶううう!! ぶぐっ!!」

「Lカップおっぱい、お味はいかがですか?♡ ねえ!?

「あああッ! んぐっ!! むぐう!! はあはあ!!

おっぱい相撲ずもうで負けて、怒ってます? むぐうううッ!!

「お仕置き……足りてないみたいね——」

本気で絞め潰す

「あぐううッ!! ぐッ!! があッ……んんッ……んぶ」

「ほら? 空気吸わなくていいの?」

「ん、ん、ん、ん、ん!! (放尿)」

秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋

「あらあ？ 奥様？」

おしっこ漏らすには早すぎないかしら？」

「はあはあはあ！ おえええッ！！ んッ！！ つぐう！！」

「さっきマナーがどうか言ってたわよね？」

温泉でおしっこするのはいいんだ？」

「ぷはああッ！！ はあッ！！ このおおおッ！！」

「ああああッ！！ くうう！！ ちくび……！！」

爪立てるなって！！ 言ったでしょおおッ！！」

「はあはあ！！ うるさい！ おんなの喧嘩でしょ!？」

「くッ……んあああッ！」

「はあッ！ はあッ！ おえええッ……」

母乳、よくも飲ませてくれましたね？」

「なによ、はあはあ……もっと飲んでいいのよ？」

いっぱい詰まってるから」

「雑魚乳首のくせに！」

薫、秋の股間へ手マン

「おっぱいで死にかけてたのはどっちかしら!？」

あああんッ！！ はあはあ！ はあああああん♡」

秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋 薫

「あら、どうしたんですか？」

「はあはあ♡ はあはあ♡」

(なに？ こいつの手マン……ちからが……)

「あなたのプライド……ぶち壊してあげる♡」

「、おオオオオッーッー♡」

「ねえ？ これ喧嘩ですよ？」

そんなに受け身でいいんですか？」

「はあはあ♡ ただの手マンで…… んおおおおッ!!」

「はあはあ♡ んんおッ♡ はあはあ♡ ふふ……

必死に返してますけど……後ろ奪われたら負けですよ♡」

「んおッ!? はあああああ♡ はあああああ♡」

「秋さん、ふふ……♡」

そこの岩の影、カメラあるのわかります？」

「はあはあはあ♡ んぐ!? あああ！」

「ねえ、もう来てるんでしょ♡ カメラに向けて、

噴射してくださいよ♡」

「だれがあ!! あんたなんかの指で!

はあああああ♡」

秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋 薫

「からだ身体は正直ですよー ほら♡ ほら♡ ほら♡ ほら♡」

「い、やああああ♡ ぐ……う……う……う……!!……お!!」

「いつまで耐えるんですか♡ はあはあ♡」

「うぐツツ!! あああ!! あああ!! あああツ!!」

「ほら、カメラに向かって♡」

「んおおおおおおおおおおおーッ♡!! (絶頂)」

「あはあ♡ 見事な潮吹きですよ、奥様」

「はあ! はあ! はあ! はあ! はあ! はあ! はあ! はあ!」

「逝かせ合い勝負でしたら、わたしの勝ちですね？」

「はあはあ♡ 先に逝かせたら勝ちみたいな、

温ぬるい勝負してるんだ？」

「負け惜しみですか? 潮しおふ吹き女さん♡」

「おっぱいで負けているから、逝かせにきたんでしょ？」

「強がるのは結構ですけど……」

まだ、わたしが有利な体勢ですよ♡」

「くっ! んあああッ!」

薫、秋を後ろから抱きしめて立たせる。

薫

「んふ♡ せっかくの温泉でしょ？
お湯の中で語り合いましょうよ♡」

薫、秋をバックドロップのように後ろに投げる

「んっ！ んあああああー！ー！ー！！」

場面転換 管理室

「監督……」

「監督。いつまで録画を観てるんですか」

「秋さまの潮吹きばかり見直すの、やめてください」

「二人とも今は温泉の中ですが……」

「薫さまのペースが続いています。」

あれだけ後ろを取られ続けたら、秋さまでもきついかと

「あっ……！」

「監督。カメラから目を離さないで」

「薫さま、あのプロレス技みたいな絞めで、

何人も窒息させてます」

///トラック③ 終

薫 秋

／／トラック④

場面転換 露天風呂温泉内

「んおあああああ!! んおおおッ!! ぶうう!!
んぶううううううう!!」

「はあはあ……がっちり極きまりました。 大だいの男が、

泣きわめく技ですよ♡」



秋 薰 秋 薰 秋 薰 秋 薰 秋 薰 秋 薰 秋 薰 秋

(いきが……ぐ……いきがあ……!)

「はあはあ……背骨が痛い? それとも腰?

あゝ、息が苦しすぎてそれどころじゃない?」

「う……ぐう……!! ぶはあああ! ぶはあああああ!

んぶうううううううううう!!」

「誰が息していいって、言いました?」

「んぶううつ! んぶつ! おえええ! はあはあ

ぐぞおおおおおお!!」

「はあはあはあ! 泣かせてやる!」

「ぶうううツ!! うつぶ!! うつぶ!!」

「ほら♡ 喧嘩でしょ? はあはあ! 一方的だと、

いじめてるみたいじゃない♡」

「ぶぐ……!! んぶつ!! むぶううツ!!」

「ほら、窒息しちゃいますよ♡」

「はあ! おえつ! おおおツ!」

「泣いて謝ったら、許すかもしれませんよ?

ねえ? どっちのおっぱいが強いかしら?」

「ぶはあッ! はあ! はあ! メス豚があ!」

薫 秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋 秋 薫 秋 薫

「死にたいみたいね潮吹きおんな！」

「ぶううううッ!! んぶううううううう!!」

「あああああああッ!! 髪い! やめなさいよ！」

「んぶうううううッ!!」

(なんでもいい……掴めるところ、ぜんぶひっばる……)

「あああ! はあはあ! 堕おちなさいよ! ほらあ！」

「があ……っ! ぶはあ! ぶはあ! 根こんくら比べよお!!」

「ああああ!! いったあああ!! はあはあ！」

堕おちろお……! おっぱいで、無様に窒息しなさい!

「ぜったい……ふりおとす……! んぶううううう!!」

「はあはあはあはあ!! あああ! あああ！」

うぎいいいいッ!!」

「んぶ……ッ!! んぶう……ッ!! んぶううう!!」

ぐぶ……! んぶ……!」

「んっ! つくううううう! ああああああッ!!」

「ぶうううううううううう!!」

薫、秋の顎から手が離れ、後ろに転倒

「ぶはあああああッ!! はあ……はあ……!」

秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋 薫

「ぶはあああああああああああつ!! はあはあはあ!!

はあはあ! おええええ! はあはあ!

死ぬ覚悟は……できてるんでしょうねえ!」

秋、薫の顔に胸を当てて抱きしめ、温泉の縁に抑え込む

「ん、おおおおおッ!! ぶぶっ! つぶう! んぶ!」

「はあはあ……あなたは耐えられるの? ねえ?

聞こえています!?」

「ぶぶ……! んぶ……! はあはあ! おええええ!

「ほらあ♡ もっと飲みなよ♡ おっぱい好きでしょ?

「ぶはあ! おええっ! あつくるしいのよ……!!

ざこおんなあ!! んぶううううう!」

「雑魚はどっちかしら♡ メス豚ちゃん♡

はあはあはあはあ……!」

「が……があ……! ぶはあああああ! はあああ!!」

「んあああっ! んあああっ!」

(蹴りはなす……!)

「このお……! んおっ! まんこ……蹴るなあ!

ああああんッ!!」

秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋 薫

薫、秋を蹴り飛ばし、咳き込む

「ぷはあああッ！　ぷはあああッ！　おええっ！
けほっ！　けほっ！」

薫が湯から上がり、仰向けに倒れる

「先にあがるなら言ってくださいよ」

「はあはあはあ！　おえ……ッ！　はあはあ」

「拷問ごうもんはこれからですよ♡　逃がしません」

「んんんんんっ！！　ぶっ！！　ぶぶっ！！」

「はあはあ♡　袈裟けさがた固めて知ってます？♡」

「んぶううううッ！！　ああ！！　んぶっ！！」

「わたしみたいな爆乳が極きめると……死にますよ♡」

薫 薫 秋 薫



「ぶうううッ！ ぶうううッ!! おおッ!! (放尿)」

「やだ♡ 苦しくなるとおしっこ漏らすの、

やめてくれませんか？ 汚いから♡」

「ぐ……ぐう……!!」

(もうちょっと……もうちょっとで……!!)

薫 秋 薫 薫 秋 薫 秋 薫 秋 薫 薫 秋

「ほら♡ 堕ちろ♡ 堕ちろ♡ わたしのおっぱいで、
地獄にいきなさいよ！」

「んんんんん!! はあはあ!! おええッ!!
ぐぶううううッ!!」

(まんこにさえ……手が届けばっ……!)

「どっちが上かしら!? ねえ!」

「うええええッ!! けほっ! けほっ!

殺してやるわよ……くそおんな……ぶぐうッ!!」

「立場がわかってないようね!」

「ぐっ!! ぶううッ!! んぐうううううう!!」

「あはは♡ 鼻から母乳が逆流してるわよ?

もう限界でしょ! ほら♡ 堕ちろ♡

わたしの勝ちよおおお!」

「ぶぐじゅッ! ぶぐじゅッ!」

(もう……すこし……)

「窒息しちゃった!? からだ、けいれん痙攣してるわよ!

はああああああああん♡」

「ちゅぱっ♡ むちゅ♡ んじゅ♡ むちゅううう♡」

秋

「はあ♡ はあ♡ はあはあ♡ こんな……

おっぱい吸われたくらい……

おほおほおほおほおほ!!♡」

薫、伸ばしていた手が秋の股間に到達し手マン

「ぷはああッ! はあ! はあ! はあ! はあ! はあ!

はあ! はあ! はあ! はあ! はあ!

わたしの手マンのテク……忘れてないですか……」

「ああああ♡ あああああ♡ ん、おおっ♡

、おおおっ♡ い、やあああ♡」

「はあはあはあ♡ 逝けっ♡ 逝けっ♡ 逝けっ♡

「んくっ♡ ああああああーっ♡

逝っくううううーっ♡(絶頂)」

「かはあっ! はあ……はあ……はあ……はあ……

「おおっ……おお……おおっ……♡」

秋・薫、お互いが距離を取る

「はあはあ……死にぞこないのくせに……」

「はあはあ……お互い様ですよ……

あなたも効いてるでしょ」

秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋

「ふう……勘違いしてるみたいだから、手マン勝負……やってあげますよ」

「あは♡ わたしに挑むんですか？ 潮吹き女が」

「意識飛んだら、どうなるかわかってますよね？

今度こそ絞め潰しますから♡」

「そっちこそ、逝き果てたら終わりですよ♡」

「ふふ♡ 自分の心配だけしてくださいね……♡」

秋・薫、立ってお互いの肩に顎をのせ、手マン開始

「んっ♡ はああああああああ♡」

「はあはあ♡ ああああ♡ のおおっ♡」

「ほら♡ また、潮吹きすれば？♡」

「はあはあ♡ あなたこそ、足震ふるえてるわよ……

おおっ♡ ンおおおおっ♡」

「はああ♡ はああ♡ どうしました？」

「あああ♡ おおお♡ おおお♡ おおお♡ おおお♡」

「はあはあ♡ 逝けえええ！ 逝けえええ！」

「あえええ♡ あえええ♡ っおおおうっ!!」

秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋 薫

「ほら♡ 相撲じゃないんだから……膝ついていいのよ。
情けなく倒れなさい♡」

「ああああ♡ ああああっ……ッ！

いっくううう!! (絶頂)」

「あは♡ 1回目……! はうううううううッ♡

んおおおおお♡ おおおおおーッ♡」

「はああ♡ はああ……♡ わかってきた♡

わかってきたわよ……♡」

「はうっ♡ あっ♡ あっ♡ だめえ♡ くううう♡

「あなたも逝きたいんでしょ♡ 逝け♡ 逝け♡」

「んんんーッ♡ だんめええええ♡!! (絶頂)」

「はああはああ♡ はああ♡ 1回目え……♡

弱いところ……ばれてますよ♡」

「はああああ♡ ああああ♡ はあああ♡」

「ああああ♡ ああああ♡ 骨^{ほね}抜き^ぬにしてやる……」

「あまくみないで……くださいよ♡」

「ああああ♡ ああああ♡ くっ……うううう!!

もう負けないわよ……!」

秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋 薫

「ああああ♡ ああああ♡ はははあ♡ んんんん!!
「にかい……め……おとおとおとおおっ!! (絶頂)」「
「にかいめっ……んおとおとおおおっ!! (絶頂)」「
「あひいっ♡ あひいっ♡」
「あへええ♡ んえええええ♡ 倒れなさいよ……」
「んお♡ そっちこそお……はははあ♡」
「あああっ! ふううっ!! ポルチオ♡ だめ♡」
「ああ♡ 逝けえ♡ 逝けえ♡」
「ああ♡ はああ♡ いやあ……♡
逝くもんかあ……♡ 逝くもんかあ……♡ うああ♡」
「さん、かい、めえ……!」
「んおとおおおおー……!! (絶頂)」「
「あはあ♡ あはあ♡ あはあ♡ からだ!
もたれないで……たおれないさいよ!」
「だれがああ……あんなんかに……負けるかあ……」
「ああ♡ くあああああ♡」
「ほら……ポルチオのお返しよお!!♡」
「はあはあはあ♡ はぐっ!! あああ♡」

秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋 薫

「はあはあはあはあ！ はあはあはあはあ！

「んおおおおおおおー！ー！ー！ツ!! (絶頂)」

秋・薫、共に転倒

「あへええ♡ あへええ♡ あへええ♡ あへええ♡

「、おお♡ おお♡ おお♡ おお♡

「はあはあはあ……まだ……まだあ……」

「はあはあはあ……いしき……とばしてあげます……」

「のうみそ……こわして……あげるわ……」

「てまんしょうぶは……」

「これからが……ほんばんよ……」

秋・薫、両者仰向けになって手マン勝負

「はあはあはあ♡ ああ♡ あああああ♡

もっと股……開きなさいよ！」

「そっちこそ、閉じるなあ！ はあ！ はあ！

にげるんじゃ♡ ないわよおお♡

「ああああ♡ あああああ♡ 逃げてないわよ！

ほら、お空に向かって潮吹きしてください!!」

「ん、おお、おお、おお♡ やめっ！ くううう♡

秋 薫 秋 秋 薫 秋 薫 秋 薫

「ここがよわいでしょ♡ ほらああああ！」

「ん、おおおおおッ♡、おおおおおおッ♡

あんたは……ここでしょおおお♡

潮吹き！ しなさいよおおお!!♡」

「あああ！♡ ああああ！♡ 逝く！

逝つくううううーッ♡(絶頂)」

「あああ！♡ ああああ！♡ 耐えれないっ♡

ああああ♡ この程度の……手マンでえ!!

、おおお♡ ん、おほおおおッーッ♡(絶頂)」

「んえええ……んええええ……うっ……おええ……」

「あはあ……あああ……んえっ……か……かは……」

秋・薫、再び股間に深く指を挿入

「んええっ♡ け、けっちやく……」

「あああッ♡ つけてやる……」

「いけえ……いけえ……いけえ……あああ……♡

こわれろお……あああ♡ はあ♡ ぶっこわれろお♡

んぐっ……い、け……んぐうう!!」

薫

「逝けっ……いけええっ……いけええっ……
つぶす……つぶしてやるう♡ あああ♡ あああ♡
そこは……ああ!!」

秋

「んおほおおおおおおおーッ (絶頂)」

薫

「んおほおおおおおおおーッ (絶頂)」

場面転換、管理室

秘書

「監督、想定より逝かせ合いが多くなりましたね。

温泉に混ぜてある媚薬びやくの影響と思われるです」

秘書

「状況ですが、秋さまの絶頂回数ぜっちょうかいすうが十五回。

対して、薫さまの絶頂回数ぜっちょうかいすうは十三回。

ただ、おっばいで窒息寸前ちっそくすんぜんまで追い込んでいる回数は、

秋さまの方が2回ほど多いです。ほぼ互角の闘いですね」

秘書

「まったく……」

どこでこんなおっばい自慢たちを見つけてくるのやら」

秘書

「ほら、またおっばいで窒息させられていますよ」

秘書

「お互いの顔をおっばいで絞めつけ合っています。

母乳まで利用して……」

そうまでして勝ちたいものでしょうか」

秘書

「爆乳自慢のプライドってやつですか。そうですか。

まあ、貧乳の私にはどうせわかりませんが」

秘書

「監督。おっばいではあの方たちには及びませんが、

逝かせ合いなら負けませんよ」

秘書

「わたしの次の相手も、早く探してください」

秘書

「それはそうと……まだ止めなくていいんですね？

このままだと本当に救急車ですよ」

秘書

「さっきからお互い、

気を失う寸前まで絞め合っていますもの」

／＼トラック④ 終

秋 薫 薫 秋



「さきに……しとめる……！」

「さきに……しとめる……！」

秋・薫、再び胸で絞めあう

「ぶぐううううっ！ ごぶ……ぶぐ……！」

「おぶううううっ！ んぶ……ぐぶ……！」

秋 薫 秋 秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋 秋 薫 薫

「ぶええええっ！ はあはあ！ んぶうううううう！」

（ぶぎまでもいい……すこしでも……くうきを……）

「おええええっ！ はあはあ！ ぐぶううううう！」

（こいつより……一秒でもながく……呼吸をうばう……）

「ぐ、ぶううううううう！！ ごおおおっ……ぐう……」

秋・薫、ごろごろと上下が入れ替わる

（うえから……おしつぶすううう……！）

（かんとんに……うえは……わたさない……）

「んぶううううううううううううううう！ ぶふ……」

「つぶ……す……」

「つぶ……すう……」

秋・薫、温泉に落下

「ぶぐ……ぶう……」

「ぶぐ……ぶぐ……」

秋・薫、相手を離す

「ぷはああああっ！ ぷはああああっ！ ぷはああああっ！

ん！ おええええええっ！ けほっ！ げほっ！」

薫 秋 秋 薫 薫 秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋 薫 秋 薫

「ぷはあああつ！ ぷはあああつ！

けほっ！ けほっ！ く……おえええっ！

「はあはあはあはあ！ これで最期よ……」

「はあはあはあはあ！ そうですね……」

「おっぱい同士で……」

「絞め殺し合いましょ……」

「はあ……はあ……はあ……」

「ふう……ふう……」

秋・薫、湯の中で立ち、胸と胸を当てて、

肩に顎を寄せ合い、抱きしめ合う

「んんんんんんあああ……」

「ん、おおおおお……ッ！ こほおッ！

「けほっ！ けほっ！ いきが……!! おええっ！

「おええっ！ ぐるじい……!! ん……ごほっ！

（くうきが……すえない……）

（肺が……つぶ……れる……）

「あああつ!! おおっ!! うぷっ！ ぐぐぶっ！

「か……かはあ……!! うぎい……!!」

秋 薫 薫 秋 薫 秋 秋 薫 薫 秋

(それでも……わたしのおっぱいのほうが……
つよい……！)

「うええええええええええッ!!」

(わたしのほうが……つよい……！)

「おええええええええええッ!!」

「ころ……すう……！ が……があ……！」

「ころして……やるう……！ かはあ……！」

「あと……すこしで……！ おええええええッ！」

「もう……すこし……！ んええええええッ！」

「お……んお……が……があ……」

……ぶへええええッ!!」

「あ、あっ……ぐぶ……ん……ぶ……」

……ぶへええええッ!!」

秋・薫、意識を失い後ろに転倒

秘書、秋を湯の中で抱きかかえる

「秋さま。秋さま……！」

「監督。勝負は引き分けでいいですよ？」

もうどちらにも、指一本動かさせませんよ」

秋

(よく……………ない……………)

秘書

「救急車はすでに呼んでいます。」

秋

監督から、責任をもって説明をお願いしますね」

秋

(よく……………な……………い……………)

(秋)

一か月後

秋

「お久しぶりね、秘書さん」

秘書

「秋さま、お久しぶりです。身体からだはもう良いのですね」

秋

「全然問題ないわ。退院たいいんまで時間かかっちゃったけどね」

秘書

「それはなによりです」

秘書

「秋さま、それで……………本日の鬨いですが、

秋

その、救急車は呼べないとのことですよ」

秋

「いいわよくわたしは。ぜんぜん問題ないわ」

秘書

「ですので、

秋

本日は決着がつくまでのデスマッチになるかと」

秋

「わかったわ。ちやくんと、決着つけてくるから。

秋

それじゃあね♡」

秘書

「お気をつけて」

秋、露天風呂へ入る

秘書

「はあ……………また、大変な一日になりそうですね」

場面転換 露天風呂 壺湯

「またそこにいるんだ」

「あら？ 遅かったじゃないですか」

「あの後、目が覚めたのはわたしが先だったみたいね。

わたしの勝ちかしら？」

「それを言うなら、退院したのは私が先ですよ♡」

秋、薫がいる壺湯に入る

「あらそう。 んふ♡ それでは、失礼しますね」

「ねえ、壺湯つぼゆに二人入るのはマナー違反って、

前に言いましたよね？」

「じゃあ追い出せばいいって、言いましたよね？」

「うふふ♡」

「あはは♡」

「聞いてますか？ 今日はデスマッチですって」

「知ってるわよ。満足いくまでやり合えるわね♡」

「…………それじゃあ、再会できたことすし」

「…………セカンドラウンド、始めましょうか？」

薫 秋

／／／トラック⑤ 終

「貧・乳・さん♡」	「貧・乳・さん♡」
<small>ひん にゅう</small>	<small>ひん にゅう</small>